

長崎大学のミッションと学士教育改革 ～長崎大学ブランドのグローバル人材育成に向けて～

片峰 茂
長崎大学長

はじめに

東日本大震災と福島原発事故という大きな試練を体験した我が国は、いま、根源的な困難に遭遇している。時代は高度経済成長を担った過去の常識や価値観では対応することができない未知の領域に突入しており、新しい時代への産みの苦しみの時期にある。途を切り拓きこの国の未来に光をもたらす新しい価値観（学術）の創造、そして新時代を担う資質を備えた次世代人材の育成を社会は待望している。その双方を担う大学への期待とその裏返しとしての改革への外圧がこれほど高まっている時は、これまででないのではないか。

次世代人材の育成を考える上で最も重要な観点は、10年前と今では世界の構造が大きく変容したことである。予想をはるかに超えるスピードでグローバル化と世界のボーダーレス化が進行し、インターネットやSNSにより様々な組織や個人を複合的に繋ぐネットワークが地球上を覆い、地球は急速に縮小しつつある。一方で、21世紀の人類が直面する課題は不況、環境、エネルギー、食糧、感染症問題など全て地球規模で複雑かつ多様である。その克服には、人類も多様性でもって対峙する他ない。稀代の思想家アントニオ・ネグりは、このような世界の変容に伴い、権力を含めた世界のフロンティア（最先端）は特定の地域に存在するのではなく、世界の各地に分散して存在することになると喝破した。世界の潮流は「集中から分散へ」、「一元性から多元性へ」である。その中で地域の多様性の意義を見直す必要がある。東西南北に細長く伸びる日本列島には、地形や気候などの自然環境や固有の歴史に規定された多様な風土が存在する。この地域の多様性の中にこそ、ブレークスルーのヒントがあるはずである。地域を掘り下げることで逆に世界が見えてくる。地域

がその特色を再認識し、東京の物真似ではないそれぞれのやり方で事業や産業を興し、人心の活性化を図ることができるか否か。そのような地方における多様な試みが、日本の閉塞状況を打破する大きな流れにつながり得るはずである。その中で、地方総合大学の役割は重大である。教育研究の個性化、高度化、国際化を達成し、他と差別化できる新しい価値観や人材を世界に向けて発信・創出しなければならない。そのことが、地方分権の先導役としての役割を果たすことにもつながる。地方総合大学がいま育成すべきは、地域の観点から世界を鳥瞰し、グローバルな視点から地域を考えることのできるグローカリティ（glocality）を体現する人材である。

長崎大学のミッション

長崎大学は日本の西南端に位置する中規模地方総合大学である。1857年にオランダ人医師により設置された日本初の医学校を創基とし、原爆ヒバクによる壊滅の体験を経て1949年新制大学として再構築された。このような特色ある設置基盤に基づき、国立大学法人長崎大学基本規則の中で、設置理念として「長崎に根づく伝統的文化を継承しつつ、豊かな心を育み、地球の平和を支える科学を創造することによって、社会の調和的発展に貢献するとの理念に基づき、教育研究の高度化及び個性化を図り、アジアを含む地域社会とともに歩みつつ、世界にとって不可欠な知の情報発信拠点であり続けるとともに、地域及び国際社会の発展に貢献できる人材を養成すること」を明記している。それを受け長崎大学学則では、医、歯、薬、工、水産、教育、経済、環境科学部といった実学系学部構成にも鑑み、「実践教育を重視した最高水準の教育を提供し、幅広い視野と豊かな教養及び

深い専門知識を備え、課題探求能力及び創造力に富んだ人材を養成し、もって地域及び国際社会に貢献すること」を本学の教育理念として謳っている。

長崎大学は、世界展開力に富む特色的分野の存在と実学中心の学部構成に鑑み、今後の機能分化の方向性を①世界的教育研究拠点形成、②高度専門職業人育成、③社会貢献（地域貢献・国際貢献）の3つに定めた。この3機能の強化方策を有機的に連動させることが、本学の基本戦略である。その際の重要なキーワードは個性化、国際化と地域の多様性である。すなわち、熱帯医学・感染症、放射線健康リスク、海洋資源・環境といった、本学の個性でもあり且つ最重要グローバル課題に関連する学術分野を中心に「地球と人間の健康と安全に資する世界的研究・教育拠点」を構築し、インパクトのある研究成果と研究者を世界へ発信する。そのことをドライビング・フォースにすることで、个性的かつ国際性あふれる長崎大学ブランドの高度専門職業人を育成することができる。他大学とは差別化された価値観や人材を創出することで、長崎大学は地域の活性化を先導し、ひいては大学の個性に先導された地域の多様性が、多様な課題に直面するこの国や世界に光を放つブレークスルーの源泉となる。したがって、本学の教育ミッションは、地域に根ざし且つ国際的リーダーシップを行使できる「地球と人間の健康と安全に資する」研究者と高度専門職業人の育成である。

長崎大学の大学院改革

研究者と高度専門職業人育成を主要に担うのは大学院教育である。本学は近年、COEプログラムなどの大型補助金の支援を追い風に、国際化に向けた様々な大学院改革に取り組んでいる。本稿の主旨からは外れるので詳細は他に譲るが、最近の大学院組織改革の経緯の概要を以下に記す。

平成14年、大学院組織統合により設置した医歯薬学総合研究科博士課程の中で、大学院教育国際化の先導組織として「新興感染症病態制御学系専攻」、「放射線医療科学専攻」をスタートさせた。さらに、熱帯感染症対策や国際協力事業の現場で即戦力となる高度専門職業人の育成に特化した特

色ある大学院修士課程として、平成18年度に医歯薬学総合研究科にすべての講義を英語で行う「熱帯医学修士課程」を、平成20年度には独立研究科として学際性に富む「国際健康開発研究科」を新設した。いずれも本邦初の特色ある修士課程であり、途上国現地における研究・国際協力人材の育成に大きな役割を担いつつある。

平成22年度には生産科学研究科を工学研究科と水産・環境科学総合研究科に分割・改組し、双方に国際的研究者育成を目指す5年一貫性専攻を設置した。工学研究科においては、平成23年度からキャンパス・アジア事業の一環として「日中韓大学連携水環境技術者育成事業」を開始している。

喫緊の課題としての学士教育改革

本学のミッションに照らせば、学部段階（学士教育）は研究者・高度専門職業人としての基盤的資質（学士力）の形成を担う。この学士教育の改革が現在の我が国の大学教育の最大の懸案となっている。18歳人口が激減する一方で、日本の大学はユニバーサル化し大学全入時代を迎えている。学士教育改革の観点、教育の質を維持・向上させ、グローバル時代を生き抜くための学士力を学生にいかに保証するかにある。文部科学省「グローバル人材育成推進会議」は、2012年の審議まとめで、グローバル人材が有すべき資質として(1)語学力・コミュニケーション能力、(2)主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感、(3)異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティの3項目を例示したが、まさにグローバル化とそれに伴って生起する社会の多文化状況の中で必要とされる人間力と社会力を身に付けた人材が待望されている。

とりわけ、東日本大震災以降の閉塞感の中で、新時代を切り開きこの国の未来に光をもたらす主役たるべき次世代人材の育成の重要性と緊急性に思いが至った社会からの学士教育改革への期待が急速に強まっている。平成24年8月に発出された中教審答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に学ぶ力を育成する大学へ～」は、学士教育改革が待ったなしであることを強調した上で、我が国の大学

生の学修時間が他国に比し圧倒的に少ないことを指摘し、主体的学びの確立のための改革の始点は「質を伴った学修時間の実質的な増加」であるべきであると踏み込んでいる。そのためには、全学的な強力な教学マネジメントの下、教員と学生が意思疎通を図りつつ相互に切磋琢磨し、知識の伝達・注入を中心とした授業から、主体的に問題を発見し解を見出す能動的学修を中心とした、学生の主体的学修を促す授業へ転換することが必須であると、強調している。

教学マネジメントの確立と教員の意識改革を実現し、学生の主体的学修に向けた授業改革をいかにスピード感をもって遂行することができるか。そのことが大学に喫緊に問われているのである。

長崎大学の共有学士像

長崎大学は、第二期中期（平成 22-27 年度）に入り、中期目標の冒頭に教育研究面での具体的目標として「学部専門教育と教養教育の有機的結合による学士力の涵養と、大学院教育の実質化により、長崎大学ブランドの高度専門職業人を育成すること」を明示し、グローバル人材育成のための学士教育改革を本格的にスタートした。まず、平成 22 年度に総合大学＝“知の共同体”実質化の原点としての全学教員の教育目標の共有と、育成すべき長崎大学ブランド・グローバル人材像の明確化を目的として、①研究者や専門職業人としての基盤的知識を有する、②自ら学び、考え、主張し、行動変革する素養を有する、③環境や多様性の意義が認識できる、④地球と地域社会及び将来世代に貢献する志を有するという 4 項目から成る「長崎大学共有学士像」を設定・周知することから取組を開始した。以下、「長崎大学共有学士像」4 項目について、若干の説明を加える。

研究者や専門職業人としての基盤的知識を有する：長崎大学は医療系、技術系、教員養成系などの実学系学部から構成される。これら実学の蓄積に基づく長崎大学の個性が、先の東日本大震災直後の支援活動で突出した。全国に先駆けて、震災発生直後に被災地に本学医療支援拠点の旗が立ち、支援物資を満載した練習船「長崎丸」が緊急出航した。そして現在も、原爆ヒバク影響研究の伝統

を引き継ぐ本学教員が、福島県民の被曝健康リスク管理という世界が注目する重要な役割を果たしている。これらを可能にした長崎大学の個性、それは「現場に強い大学、危機に強い大学、行動する大学」である。この伝統的個性を学び、将来それぞれの領域のエキスパートとして国際的に活躍するための知的基盤を涵養する。個々の知識や技術とともに、ブレークスルーの創造につながるそれぞれの学問領域における物事の考え方の習得に力を注ぐ。

自ら学び、考え、主張し、行動変革する素養を有する：創造性、柔軟性、自立性、チームワーク力、コミュニケーション力、批判的思考力、自己管理能力など、特定の枠組みを超えてさまざまな状況の下で適用できる力、即ちジェネリック・スキルを身に付けさせる。これは世界の若者と対等に戦うために不可欠の素養である。その中で最も大切なものとして、主体的に学ぶ力がある。机の上で勉強することに止まらず、自ら観察し、調べ、体験し、考え、決断し、そして実践することのできる力である。この力を育むために、長崎大学は授業の在り方を変え、学生が主体的に参加する授業、課外での自学自修につながる主体的学びへ転換する。

環境や多様性の意義が認識できる：いまや地球環境の重要性の理解なしには、地球と人類の持続可能な未来を語ることはできない。環境教育は、環境科学部というユニークな学部を擁する長崎大学の目玉でもある。そして、多様性である。地球にはきわめて多様な生物が存在し、人間も、民族も、文化も、宗教も多様である。多様性を尊重し、異なる人格、民族、文化、宗教がお互いを理解し連携することが、人類に課せられた最大の課題である。異なる文化を理解するための手段が言語の共有である。世界共通言語としての英語の重要性に鑑み、英語教育を抜本的に改善し、入学から卒業までの一貫した英語教育体制を新たに構築する。多文化理解には、また異文化環境に身を置き生活する体験がきわめて有効であり、在学中の海外留学を強力に推進する。

地球と地域社会及び将来世代に貢献する志を有する：未来に向けた志、それこそが学生たちが大

学で獲得すべき最重要のものである。地球規模で考えることのできる人材、次の世代を考えた行動をとることのできる人材は、本学が育成を目指すグローバル人材である。これまでの本学の伝統である途上国の発展に寄与する人材育成等にも通じるものであり、広く次世代への貢献を目指す志の高い人材を育成する。また、地域の課題を語るにはグローバルな視点が不可欠であり、地域の多様性の中にこそグローバル課題解決のヒントがあること、即ち“glocal”な観点を植え付ける必要がある。“志”の涵養のためには、海外留学、海外フィールドでのインターンシップやボランティアの意義は大きく、そのような機会を数多く学生に提供すべく学士教育カリキュラムの改革を推進する。

長崎大学の学士教育改革

「長崎大学共有学士像」の実現に向けて、平成24年度から具体的なアクションを開始した。取組の眼目は、学長・教学担当理事のリーダーシップの下、全学教務委員会による教学マネジメントを確立し、教養教育と英語教育の改革をドライビング・フォースにして、教員の意識改革と専門教育を含む学士教育全体の授業改革を促すことである。また、学生の学修進捗状況の把握や教員と学生の双方向性のコミュニケーションのツールとしての「主体的学修促進支援システム(LACS)」も早急に導入すべく準備を開始している。

新しい教養教育による授業改革：これまでの授業を大きく改革し、学生が自ら学び、考え、議論し、発信するPBLなどの学生参加型授業(アクティブ・ラーニング)を本格的に導入するため、平成24年度の新入生への教養教育科目のモジュール化という新しい仕組みを導入した。モジュールとは一つのテーマを軸に構成される一まとまりの科目の集合を意味し、学生が「哲学」、「歴史学」といった個々の科目を自由に一つずつ選択する従来方式を改め、学生は「健康と共生」、「グローバル社会へのパスポート」などのマクロな教育目標を共有する6から8科目の体系化された集合体からなるモジュールを選択する。1モジュールには80名程度の学生が属し、教員と学生間、教員間の密接なコミュニケーションに基づき双方向型のア

クティブ・ラーニングが1年次後期から2年次後期まで継続される。アクティブ・ラーニングを通してグローバル人材に必要と考えるジェネリック・スキルの涵養を目指す。またモジュール科目における授業改革成果を、専門教育にも波及させたいと考えている。

英語教育改革：それぞれの学部で卒業時のTOEIC目標値を設定し、入学時から卒業時までの一貫した英語教育体制を新たに構築する。その実効ある遂行に向けて、平成24年度、言語教育研究センターを新設し、専任の英語担当教員の数を倍増した。また、英語力は教室の中の学修のみでは飛躍的向上は望めないため、自学自習システム(CALLシステム)を整備するとともに、在学中の海外留学のチャンスをできるだけ多く提供できるよう単位互換留学制度の大幅拡大も図りつつある。英語教育においても学生による主体的学修を促すことが最大の課題となる。

主体的学修促進支援システムの開発・導入：教務、eラーニング、CALL等の既存システムと連携して教育情報を統合管理し、学生のジェネリック・スキルを含めた能力の取得状況、自主学修時間等をアンケートシステムにより定期的に取得し、蓄積、管理するシステムを開発中である。統合管理したデータを基に学生ポートフォリオを作成し、個々の学生の学修状況を俯瞰することを可能とする。教養教育におけるモジュール科目を中心に本システムの活用を開始し、それを学士教育全体に普及させることで学生の主体的学修力涵養に資する。

人文社会系新学部(多文化社会学部)設置の意味

本学に欠失していた人文社会系教育研究領域を導入することで、総合大学としての基盤を強化し、文系グローバル人材育成という地域の強い要請に応えるために、本学の特色を体現する新学部(多文化社会学部)の平成26年度開設に向けて準備を進めている。

多文化社会学部は、人文社会系学部としての出口における専門性を担保しつつ、モジュール型カリキュラムによるアクティブ・ラーニングを全面採用し、グローバル人材の基盤的資質としての語

学力・コミュニケーション能力とジェネリック・スキルの涵養に重点的に取り組む。とくに、人文社会系諸分野を“多文化社会”の観点から再編・統合した学際性（interdisciplinarity）に富むカリキュラムにより、経営・法律・政治等の社会科学系と、世界の各地域の多様な社会、宗教、文化、歴史を理解できる人文学系の知識及び考え方を併せ持つ人材を育成する。さらに、フィールド調査活動や言語的・文化的背景を異にするメンバーから成る異種混浴型の国際的プロジェクトへの参画を通して、マネジメント能力も涵養する。

大きな特長は、長崎のオランダ、中国との異文化交流の歴史や、熱帯医学研究所を中心に長年にわたって蓄積されてきたアフリカを中心とした途上国フィールドでの教育研究基盤などの、他にはない本学の背景及び教育資源を、多文化社会理解のための糸口、切り口とし、また教育フィールドとして活用することである。このことにより、明確に差別化された特色あるカリキュラムを学生に提供する。

多文化社会学部は、これまで本学では希薄であったリベラルアーツ系教育研究の核として機能するとともに、グローバル人材育成に向けた学士教育改革と教育マネジメント改革を先駆的に開拓・実践することで、新たな未来に向けた総合大学長崎大学の基盤構築に大きく貢献してくれるものと期待している。

おわりに

長崎大学における一連の学士教育改革のゴールは、時代の要請に応える新たな学士教育プログラムの創生及び総合大学としての基盤の再構築にある。それを達成するための重要な観点は、教育現場で学生と直接向き合う個々の教員の皆様に、“待ったなし”の危機感、育成すべき学士像、及び長崎大学の改革方針を共有していただくことが大前提となる。法人化以降の競争的環境、経営の重圧の中で、確実に教員の負担は増加している。その中で、大きなエネルギーを使って教育改革に取り組んでいただくわけが大変とは思いますが、これからの若者のためにも、この国の未来のためにも、必須の改革であることをご理解いただき、教員各位

のご協力を衷心よりお願いしたい。

多文化社会学部の創設にあたっては、経済学部と環境科学部を中心に全学から学生定員と教員ポストを供出していただくことになる。これをマイナスにとらえることなく、各学部はこれを契機に懸案を解決し、新しいグローバル時代に相応しい専門教育改革を進めていただきたい。その意味では、経済学部の国際ビジネスコースの新カリキュラムが今年度の文科省のグローバル人材育成推進事業に採択されたことは、快挙であり、大学全体の教育の国際化の大きな推進力となることをおおいに期待している。

そして、これまでにまして、各学部（学問領域）の教育研究の高度化を通してお互いが切磋琢磨するとともに、有機的連携が図られるべきである。今後多様化する一方の高等教育へのニーズに、限られたマンパワー（教員数）で対応するには、現在の学部に関じた教員組織では限界があり、将来的にはもっと可塑性のある教員組織に変化する必要があるであろう。学部横断の全学出動型教養教育に加えて、学部の枠組みを超えて、学生が学ぶことのできる新たな専門教育システムの創生を展望したいものである。